

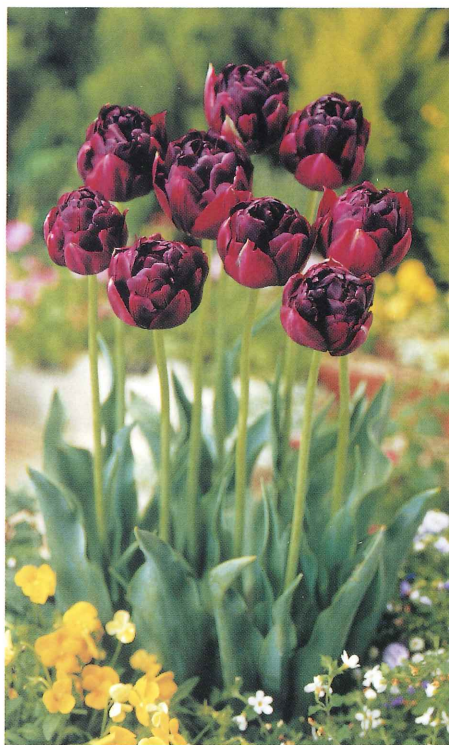


クイーンオブナイト



ブラックパロット

(写真提供／富山県花弁球根農業協同組合)



ブラックヒーロー

チューリップ 四季だより

黒いチューリップの魅力

「チューリップ」といえばオランダをイメージしますが、元来チューリップは、中央アジアを中心に自生しており、トルコから園芸植物としてオランダへと伝わりました。それは十六世紀の終わり頃で、瞬く間にチューリップ栽培が盛んになりました。生産者はチューリップの将来が明るいものであると確信していたようです。その思惑どおり、専門家たちの手によって、色や形などバラエティーに富んだチューリップが作り出されるようになりました。十七世紀にはイギリスやフランスにも生産が普及し、異常な人気を集めることになりました。

そのような中でマニア達の間でチューリップが異常に高値で取引されるようになった時代があります。それをチューリップ狂時代と呼んでいます。

アレクサンドル・デュマ著の「黒いチューリップ」はオランダ人の黒いチューリップへの情熱が描かれています。「クイーンオブナイト（二九四四）」、「ブラックパロット（一九三七）」といった黒に極めて近いチューリップはオランダ人にとって夢のチューリップでした。

2009
Vol.43

随想

『チューリップに操られた？』 私の園芸人生

山本規詔

私が園芸の世界に足を踏み入れたのは、今を去ること約四十年前、当時小学生だった私が一鉢のサボテンを手にしたことに始まります。

園芸の勘を養った少年期……

私の両親はともに花好きで、とくに父親は凝り性の典型的な園芸親父。庭木、花壇草花に始まり、大菊、花菖蒲、皐月、石楠花、山野草、野生ラン……という具合に、広くもない庭を植木鉢で埋め尽くしていたのを今でも懐かしく思い出します。

少年期にそれらの植物を眺め、植え替えや水やり、剪定など、もろもろの園芸作業を手伝いました。その経験が私の「園芸の勘」を養うのに相当役立ったのは間違いありません。

サボテンとの出会い

くだんのサボテンは、熱田神宮の縁日でみつけた小さな一鉢で、「翠晃冠」という名札がついていました。面白半分には軒先に置いたのが、忘

れかけた翌年の春に白い花が咲き、サボテンの魅力に引き込まれた。それが私の「園芸事始め」です。

サボテンに興味を持った私は、母親に栽培書を買ってもらい、それがギムノカリキウム属の一種で南米産であることや、サボテンは南北アメリカにたくさん種類が生息していて、属の分類、学名のことなど、夢中で読みふけりました。無論、小学生の身では年に数鉢増やすのがやっとでしたが、こわれたガラス水槽の栽培箱が、ついには屋根上に一畳大のフレームを持つほどの熱の入れよう。私のサボテン趣味はかなり長く続き、後年、植物園配属のきつかけとなったのもサボテンのおかげでした。

しかし、決して園芸オタクな少年だったわけではなく、時にはギターをかき鳴らし、また美術館にも出かけるという普通の青春時代も過ごしていました。それから幾星霜：農家でもなかった私が、植物漬けの人生をあゆむようになるとは、運命とは思えないものです。

チューリップの想い出

実を言うと、私の幼少期の最も古い記憶の中にあるのはチューリップなのです。三歳くらいのころ、庭にあった木瓜の根元に咲くチューリップが数輪、春の陽射しに輝いている光景が強く記憶に残っているのです。そのチューリップの印象が、無意識のうちに人生の道

【略歴】

山本 規詔 のりあき
園芸家 Plantsman



一九五八年 名古屋市出身。三重大学

卒。名古屋市農業センター、名古屋市農産課を経て、一九八八年から東山植物園に勤務。温室・花壇などの数千種類に及ぶ植物の管理・育成、導入、分類、展示を担当。当時困難とされた樹齢一〇〇年を超える巨大サボテンの蘇生など、特殊な植物を扱う技術を磨き、しばしば海外で見聞を広める。松下電器産業労働組合が運営する「ユニトピアさ

しるべになった……というのは出来すぎた話でしょうか。

思いかえせば、多くのすばらしい人との出会いと、意外な偶然が重なって今の自分があります。それは幸運としかいいようのない稀有の経験でもありました。育ててくれた両親に感謝をしつつ、来るべき日に備えて精進の日々です。

さやま花の植物館」に移り、カナダ人の園芸技術者とともに欧米の本格的な装飾園芸技術を学ぶ。

一九九五年 安城市のデンパーク建設計画に加わり、開園一年前から『デンパーク改造プロジェクト』に着手。多数の見本園的「花の見どころ」を考案。

一九九七年の開園年度には一二〇万人超の入園者数を記録。その後は緑地専門監として園全体の植栽・修景デザイン部門の総括を担当。連続して五十万人台の入園者を迎え、同規模の公園としては異例の実績を上げる。

二〇〇八年 フリーの園芸家として、食をテーマに活動を始める。趣味でダイヤモンドリリーの育種を続けている。

チューリップ球根輸入事情

外国から植物等を輸入する時は、港で病害虫及び土壌の付着がないかを検査します。検査後チューリップ、ゆりなど多くの球根は隔離栽培し、ウイルス病などの検査を行います。オランダなどの輸出国によっては決められた品目について日本での隔離栽培に代わる制度があります。

■隔離検疫について

港での植物検査では植物がウイルス病に保毒しているかどうか技術的に判定できないため、

特定の植物については植物防疫所の隔離圃場で、その植物の生育中に検定植物への接種や抗血清による診断などの技法を用いて精密に検査を実施します。また、

球根では輸入する側が用意した栽培地での隔離栽培が実施されている現状でもあります。

チューリップやユリ、ヒアシンス等の球根類は隔離栽培の対象となります。

隔離栽培は五〇m以内に同じ科の



植物（チューリップならユリ科植物）が栽培されていない隔離地で、農林水産省植物防疫官の指導のもと、栽培・病害虫防除を行い、検査に合格したものののみ日本国内に流通させることができます。隔離栽培は技術的に球根産地のみ実施することができ、オランダから直接輸入できない品種も流通させることができます。

また、球根については、隔離栽培に代わる「隔離栽培代替制度」があります。

■隔離栽培代替制度について

外国から輸入されるチューリップ球根のうち、オランダ、ニュージーランドの生産国内において現地の検査機関が日本側が定めた検査を行うことにより、日本での隔離栽培を免除する制度があります。

つまり、現地において両国間の合意のもとに検査を実施し、「植物検査証明書」が発行されたものについては、輸入検査の際に検疫対象病害虫の付着が認められなかった場合、日本での隔離栽培を免除するものです。

さらに輸入原種や輸入する販売用の球根はそれぞれの種苗会社との取り決めにより、ランク付けされます。日本向けの最高品質の球根は、ほ場管理コストが高く、年々減少しています。特に栽培難度が高い特殊咲き品種を中心に、日本に輸入できない品種が増えています。

季節展示

「四季の花まつりーサクラ」

と き：2月5日(木)～3月31日(火)

ところ：チューリップテラス

‘四季の花まつり’の第8回のテーマは「サクラ」。日本人の心の花、サクラとともに和名に「サクラ」の名を持つ草花とチューリップで彩る早春の和の庭をお楽しみください。



●チューリップ四季彩館●

パスポート会員募集中!

購入日より一年間ご提示いただくだけで何度でも四季彩館の特別展や常設展に入場できます。また、四季彩館の各企画展だけでなく、チューリップフェア会場へも何度でも入場できます。そのほか、チューリップ四季だより等の最新情報が得られます。

【パスポート料金】

大人・高校生	2,500円
シルバー(65歳以上)	2,000円
小・中学生	1,000円

【申込み】 四季彩館カウンターで随時受け付けています。

2009

咲いた、並んだ、日本一。

450品種でつくる、お花畑の万華鏡。

Tonami

Tulip Fair

2009 となみチューリップフェア

日時 4月23日(木) ▶ 5月6日(水) [8:30am - 5:30pm]

※天候などの影響により会期を変更する場合があります。※ベビーカーは会場に入れません。

会場 となみ 砺波チューリップ公園



チューリップフェアの
前売券は右のコンビニで
お求めになれます。



前売券
2月1日
発売開始

入場料

大人(高校生以上)	1,000円
小人(小・中学生)	300円
シルバー(65歳以上)	800円

駐車整理料

大型バス	2,000円
マイクロバス	1,000円
普通車	400円

※前売券及び団体20名以上の場合は100円引きとなります。
※5月5日は小人無料です。

【主催】 (財) 砺波市花と緑の財団 砺波市



チューリップ四季彩館
TONAMI TULIP GALLERY

〒939-1381 富山県砺波市中村100-1
TEL (0763) 33-7716 FAX (0763) 33-0090
<http://www.tulipfair.or.jp>



チューリップ四季彩館

検索

2009年3月18日発行